

令和 5 年 10 月 16 日現在

機関番号： 99999  
研究種目： 奨励研究  
研究期間： 2022 ~ 2022  
課題番号： 22H04119  
研究課題名 行動経済学的アプローチによるジェンダー教材の開発とその効果の実証研究

## 研究代表者

埴 枝里子 (Hanawa, Eriko)

東京都立農業高等学校・主幹教諭

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 470,000 円

研究成果の概要：本研究は行動経済学の見方・考え方を活用したジェンダー教材を開発し、授業実践を行い、生徒の変容を捉えるものである。これまでのジェンダー教材は正しい知識・技能を習得すればジェンダー平等が解決に向かうことを前提としており、無意識的なバイアスがあるために格差が存在することには踏み込まれていなかった。筆者は行動経済学の見方・考え方を授業に取り入れることで生徒が社会的事象をより深く捉えられるという仮説のもと、教材の開発・実践及び検証を行なった。研究の結果、教材の一定の有用性を確認できたが、深化させる余地が多分にあることが明らかになった。より精緻な授業の効果測定とジェンダー教材の充実に今後の課題としたい。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は二点ある。第一に、これまで行われてこなかった行動経済学の知見を用いたジェンダー教材を開発、実践したことである。第二に、多くの生徒が無意識に根付く固定観念やジェンダー平等を実現する困難さを理解し、格差解消の政策提案ができたことから、授業の一定の有用性を確認できたことである。ジェンダー格差がなくなることは無意識のバイアスだけで説明できるものではないが、行動経済学の知見を用いることで社会的事象をより現実に即して捉え、その上でどのようなことが出来るのかを提案できるようになることが検証できた。今後は内容の深化と対象範囲の拡大を追跡研究の対象としたい。

研究分野： 教育学

キーワード： 行動経済学 ジェンダー アンコンシャス・バイアス リンダ問題

## 1. 研究の目的

本研究の目的は、行動経済学的アプローチによるジェンダー教材を開発し、授業実践の結果を効果測定することで、教育現場におけるジェンダー格差の克服を目指すことである。

これまでのジェンダー教材は正しい知識・技能を習得すればジェンダー平等が解決に向かうことを前提としており、無意識的なバイアスがあるために格差が存在することには踏み込まれていなかった。筆者は行動経済学の見方・考え方を授業に取り入れることで生徒が社会的事象をより深く捉えられるという仮説のもと、教材の開発・実践及び検証を行なった。

## 2. 研究成果

### (1) 行動経済学の知見を用いたジェンダー教材の開発及び実践

行動経済学の知見を用いたジェンダー教材には、心理学者の Tversky, A. and D. Kahneman (1983) が発案したいわゆる「リンド問題」と原典不明だが、有名なジェンダー・ステレオタイプに関する事例をクイズにして取り入れた。

#### 【クイズ】

リンドは 31 歳で独身。素直な物言いをし、非常に聡明な女性です。大学では哲学を専攻していました。学生時代には、差別や社会正義といった問題に深く関心を持ち、反核デモにも参加した経験があります。さて、現在のリンドの状況を記述したものとして、以下の 2 つの選択肢のうち、どちらの可能性がより当てはまりそうですか？可能性の高い方を選んでください。

A リンドは銀行の窓口がかりである。

B リンドは銀行の窓口係で、フェミニスト運動に参加している。

フェミニスト運動とは...女性解放思想、およびこの思想に基づく社会運動の総称

#### 【クイズ】( )に入る語句は何だろう？

父親と息子が交通事故にあいました。

父親は死亡、息子は重傷を負い、救急車で病院に搬送されました。運び込まれた父親と息子を見た瞬間、外科医は思わず叫び声をあげました。

「手術なんてできない！その子は私の( )息子」だから」と。

生徒は【クイズ】からは物事を直感的に判断してしまい、確率を処理できないこと、【クイズ】からは職業選択とジェンダー・ステレオタイプには根強いバイアスがあることを体感し、実は合理的と思える判断にも無意識のバイアスがあることを理解することが出来た(代表性ヒューリスティクス)。

その上で労働市場におけるジェンダー格差をどのように乗り越えるか、採用、男性の育休取得という具体的な現代の諸課題を考察させた。

### (2) 開発教材の有用性の確認

本研究で開発した教材を通して、生徒は多面的・多角的に現代の諸課題を考察することが出来た。具体的には、行動経済学の知見を用いていない前年度と比較すると以下の点で差異が見られた。

- ・採用、男性の育休取得という具体的な現代の諸課題を考察する際、I. Bohnet (2016) も提案する行動経済学的アプローチによってジェンダー格差を乗り越えるしくみを考察することが出来た
- ・ジェンダー課題について綺麗事で終わらせないという問題意識を醸成することが出来た

対象者の多くの生徒が無意識に根付く固定観念やジェンダー平等を実現する困難さを理解し、格差解消の政策提案ができたことから、授業の一定の有用性を確認できたことから、本研究は一定の有用性があったと言える。当然のことながら、ジェンダー格差がなくなることは無意識のバイアスだけで説明できるものではない。多くの差別や偏見の問題と同じように、家庭環境や所得、選好などさまざまな要因が関わっている。しかし、行動経済学の知見を用いることで、差別や偏見について綺麗事で終わらせず、社会的事象をより現実に即して捉え、その上でどのようなことが出来るのかを提案できるようになると考える。

一方、セクシャルマイノリティなどの話題は踏み込めず、また開発教材の実践も新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり研究者の所属校のみに留まるなどの課題が残った。今後は内容の深化と対象範囲の拡大を追跡研究の対象としたい。

主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 埴 枝里子	4. 巻 42
2. 論文標題 行動経済学の見方・考え方を活用したジェンダー教材に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『経済教育』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 埴 枝里子
2. 発表標題 経済の見方・考え方を活用したジェンダー教材の報告
3. 学会等名 経済教育学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

DOIは今後「あり」になる予定です。
--------------------

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名
----	--------